

第7章 調査成果の検討と位置づけ

第1節

初期農耕集落としての瓜生堂遺跡

秋山浩三

1. 瓜生堂遺跡北東部における様相

(1) 弥生前期における地形環境

今回の当センター調査区は、瓜生堂遺跡では北東端部域に相当する。付近ではこれら以外に、大阪府教育委員会、東大阪市教育局、(財)東大阪市文化財協会による発掘や試掘調査が実施され、その対象地はおおむね東西約750m、南北約23mの範囲におよぶ(図390)。このうち市45次区や今回の99-1区・2区、01-1区等では、それまでの試掘成果に規定され弥生前期相当層まで発掘がおよんだ範囲は限定されたが、それ以外では当該期の様相に関してほぼ把握することができる。本項では、これらの成果に依拠して遺跡北東部における弥生前期の様相を概観し、今回の調査の位置づけを試みたい。

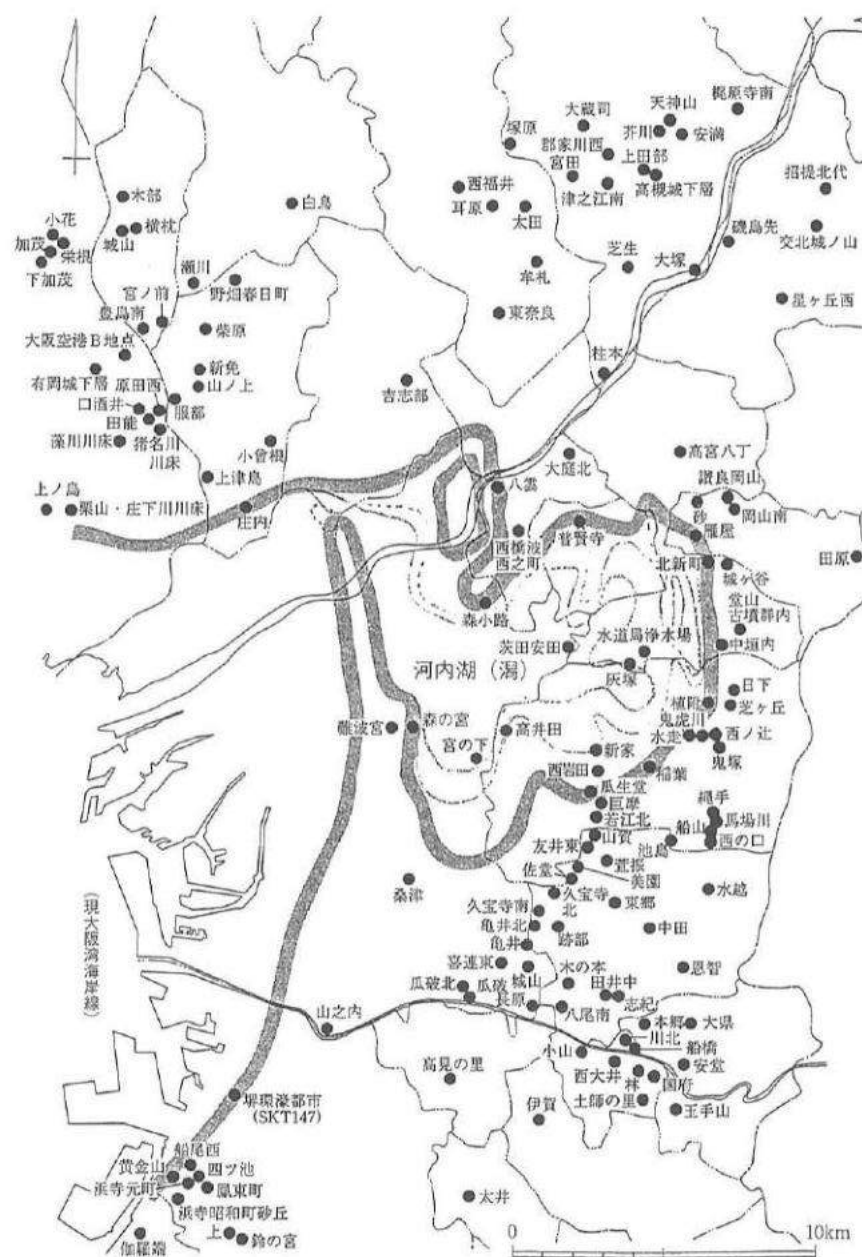


図389 河内湖周辺部等における縄文晩期・弥生前期遺跡分布

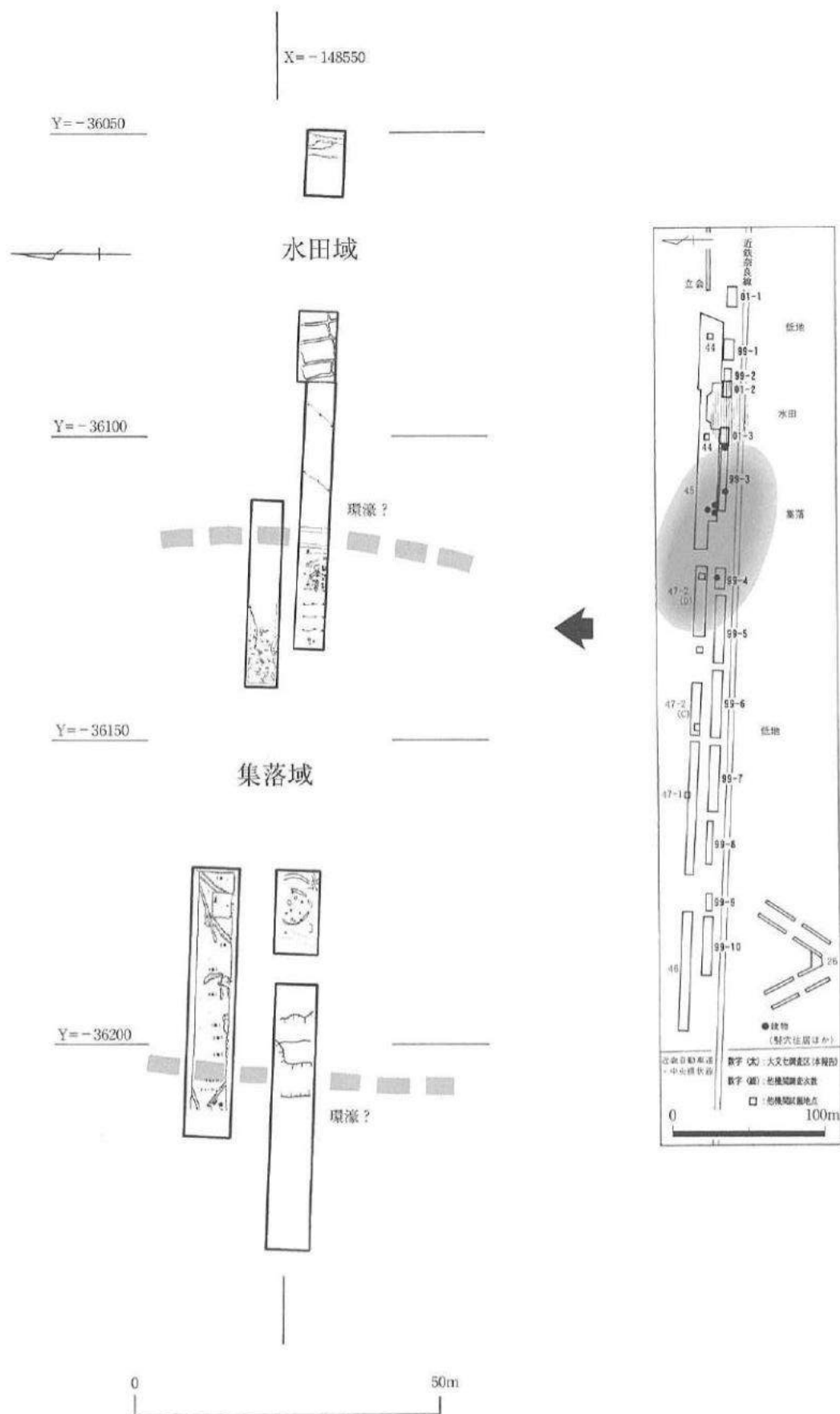


図390 瓜生堂遺跡北東部における弥生前期遺構配置図

まず、一帯における当時の地形環境を確認しておこう（本書図4～9、表2参照）。

これらの調査区のすぐ北側（現在の近鉄ハーツ部）における試掘調査では、弥生前期相当層にまったく遺構・遺物は存在せず、当時では河内潟・湖域にあたる事が判明している（図389参照）。したがって、本遺跡北東部付近は、河内湖に面した南岸域いわば“ウォーターフロント”に相当することになる。

この東西約750mにわたる地形の大略的様相としては、①99-3区西半部（および市45次区西側部分）以西と99-5区東端部（および市47-2次（D）区東半付近）以東の間の微高地、②それより東側の微低地、③それより西側の微低地、に3区分できる。この地勢に応じて、弥生前期では基本的に、①では集落域、②では水田域として利用され、③は水田域の可能性を残すものの不利用地として把握できる。出土遺物量は、①では多いが他は極端に少ない。このように地形に相応した、①集落域、②墓域、②低地域の三様の展開が固定的にみられる。存続時期については、出土土器での把握によるかぎり、原則としていずれも前期前半（新相）を主体とする。その前後期の土器もごく少量みられるが、土器様式として比較的単純期の所産といてよい。

したがって、今回確認した集落・水田域は、空間的にも土器様式的にも比較的単純なかたちでの対応関係を把握でき、同一集団の形成によると考えてよい。しかも、所産は弥生開始期での比較的早い段階に相当し、その意味においても居住域と生産域がセットで検出できた意義は大きい。以下にこの初期農耕集落の実態を簡単にまとめておこう。

（2）集落域

居住域は、①微高地上で顕著に確認でき、弥生前期前半（新相）という土器小様式内で形成された集落だが、99-3区・4区等では2、3面の遺構面として把握できたので、決して短期間での存在ではない。

遺構には、竪穴住居が99-3区・4区で各1棟、市45次区で3棟、掘立柱建物（竪穴住居の痕跡の可能性大）が99-3区で1棟、と建物遺構が計6棟確認でき貴重な情報を提供している。それ以外では、土坑、溝、柱穴等がみられる。このうち、99-3区のほぼ中央、微高地東端部かつ低地・水田域との境界付近において、幅約3.5mで深さ約0.4mのほぼ南北方向の溝S03371A・B（第22～20面）が2時期にわたって開削されている。一方、99-5区の東半部、この微高地西端部から低地部に下がりつつある箇所には、幅約1～2.5mで深さ約0.3mの南南西-北北東方向の溝S05300（第25面）、および幅約5～9mで深さ約0.65mのおおむね南北方向の溝S05290（第24面）が2遺構面で存在する。微高地両端におけるこの2箇所溝間の東西距離は約85mを測る。これらの溝が集落域の実質的な東西端を画する機能を備えており、溝から外側（低位部）では出土遺物が激減する。それら溝の北側への延長部分は、市調査区では発掘対象外深度であったり不明確な点が多いので明言できないものの、これらが集落域を画する環濠となる可能性がある。ただし、環濠か否かの最終的決着は今後の発掘成果に待ちたい。また、この一帯では、当該域の遺構・遺物はこれまで他には確認されていないので、この集落域は少なくとも東西幅約85m程度の規模をもち、単独で存在していたと想定できる。

（3）水田域

水田域は、②微低地部の01-3区で小畦畔を検出したことによって確認できた。ほぼ南北方向の小畦畔が平行してのび、その間をほぼ東西方向の小畦畔で連結させて小区画水田を形成している。水口と想定できる畦畔の途切れ部も確認できる。一部推定を含め面積計測できる田面の一筆は、約9㎡と約16.5㎡となる。この水田遺構は、近畿地方でも比較的古い段階の所産として重要である。畦畔が実際に検出

できたことにより、水田耕土層の特定が可能になった。相当層は周辺にも展開しているので、遺構として未検出ではあるものの、水田が一带に展開している可能性が強い。さらに、01-3区の東に位置する01-2区ではほぼ南北方向の溝を検出できたが、それらも水田・水利関連の施設であろう。

なお、畦畔を確認した01-3区の東約330mに位置する確認調査02-4区では、類似層順から弥生前期土器が数片出土しており、その付近まで水田が展開していた可能性も考慮しておくべきかとも考える。

(4) 低地部域

一方、③微低地部では、上記の水田耕土と類似する層順堆積は確認できるが、水田としての利用の有無等は明確にできなかった。ここでも水田等が形成されていたことは予測しておかないといけないであろう。

(5) 遺物の様相

上の遺構内容をふまえ、遺物に関し概観しておこう。弥生前期の遺物は、集落域において比較的多く出土した。

土器類では、センター・市分ともに、前期前半（新相）の比較的一括性の高い内容を示し、しかも安定した多くの量が出土したので貴重な資料となっている。これらは、前期を前半・後半に二大別した場合の前半に含まれ、そのなかでも新相にあたる。近畿の代表的な土器編年案にあてはめると、厳密な対応は容易でないが、佐原1968の中段階（の後半）、井藤1981の1-b～c、寺沢・森井1989のI-2、田畑1997の1-2（～3）、若林1999の様相2（古相）におおむね相当する。従前の編年上の検討素材とされる諸資料のなかでは、本遺跡の南約2kmにある山賀遺跡の諸土器群（大阪文化財センター1984）が比較的近い内容である。また、当地では在地品でない生駒山西麓産土器が、センター99・01年度調査区の集計では約85%、市教委調査区分では8～9割もみられ、異常ともいえる高占有率をみせる（本章第4節参照）。これは後述のように、弥生開始期における当地域での在来・縄文系集団との関係性を考察するうえで重要な素材となる。

土製品には、紡錘車（非土器片転用）や土鍾が含まれており、当該期の周辺集落の様相とも共通する特徴である。しかも、これらも生駒山西麓産胎土で製作された労働用具として注目できる。焼粘土塊もやや顕著に確認でき、その多くを一定の意図により報告しておいた。木器には、やや特殊な形状の広鋏をはじめ鋏が2点含まれており、この段階の資料として刮目できる。

石器も各種が出土した。うち、サヌカイト石器製作に関しては、弥生中期に比べて無駄の少ない効率的な消費状況を示している。しかも、近畿・二上山産のほかに四国・金山産の割合がかなり高率（約53%）におよぶ実態がみられる。金山産は器種別では楔形石器がもっとも多く、微細剥片なども出土していることから、本遺跡における同石材での石器製作を裏付けている（本章第7節参照）。また、断片のためやや不明確さが残るが石棒の可能性もある資料もみられ、近畿の初期弥生遺跡において、石棒や土偶といった縄文系呪術具が残存する現象（秋山2002a～c、同2004、ほか）との関連性が注意される¹¹。

2. 初期農耕集落としての位置づけ

以上の瓜生堂遺跡北東部の様相を基礎にして、今回明らかになった内容の位置づけをおこないたい。

(1) 小規模（環濠）集落と初期水田ほか一遺構からの検討一

微高地部の前期前半集落は、環濠をともなう可能性をもち、東西幅（径）約85mの範囲におさまる小規模集落であり、そこで実際に建物遺構も発見された。

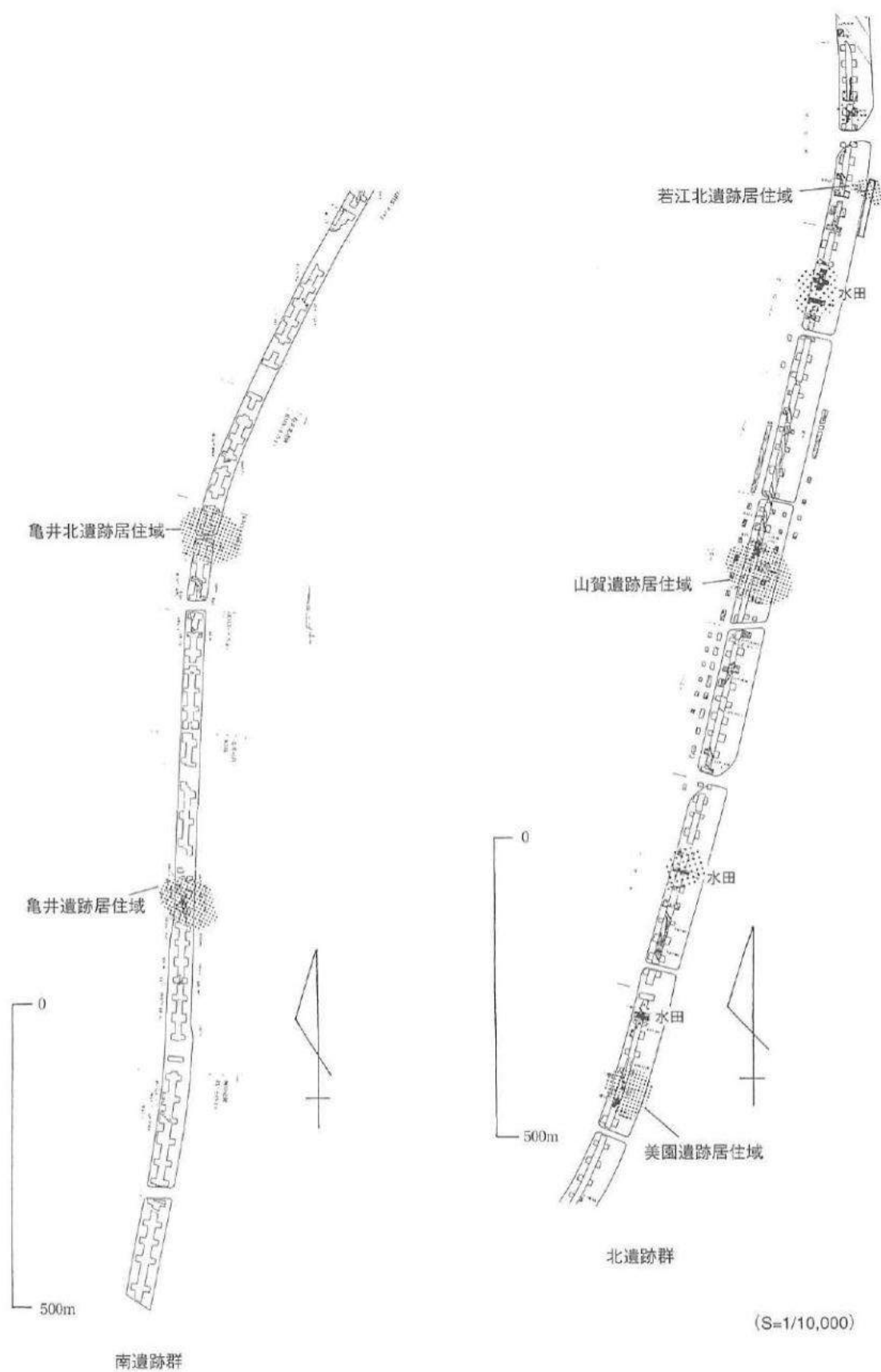


図391 河内平野弥生前期集落の分布状況（近畿自動車道関連調査部）

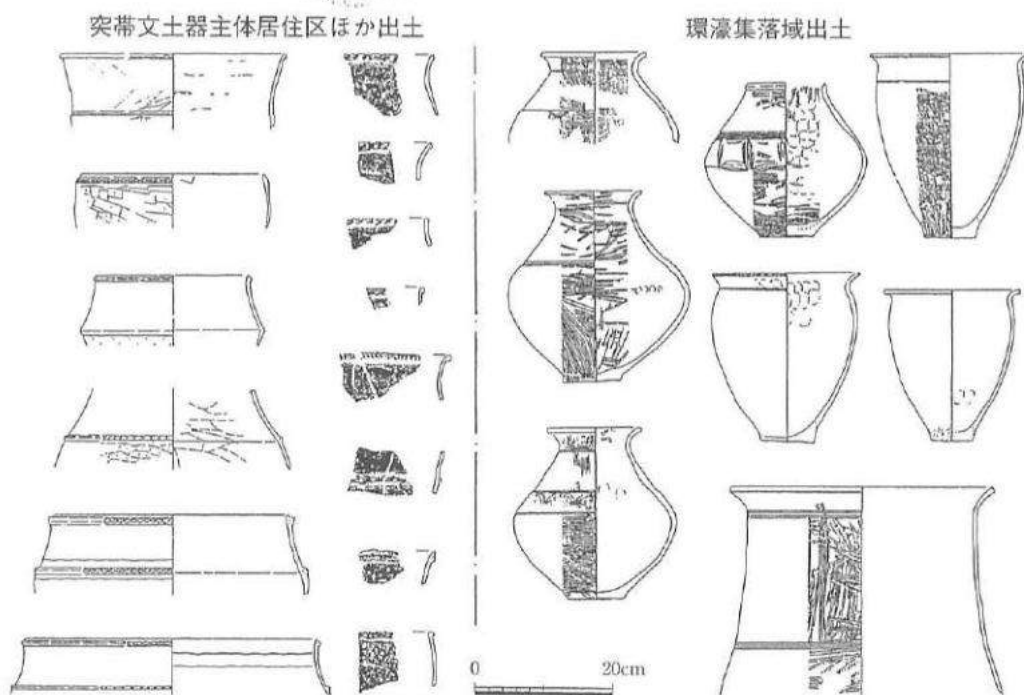
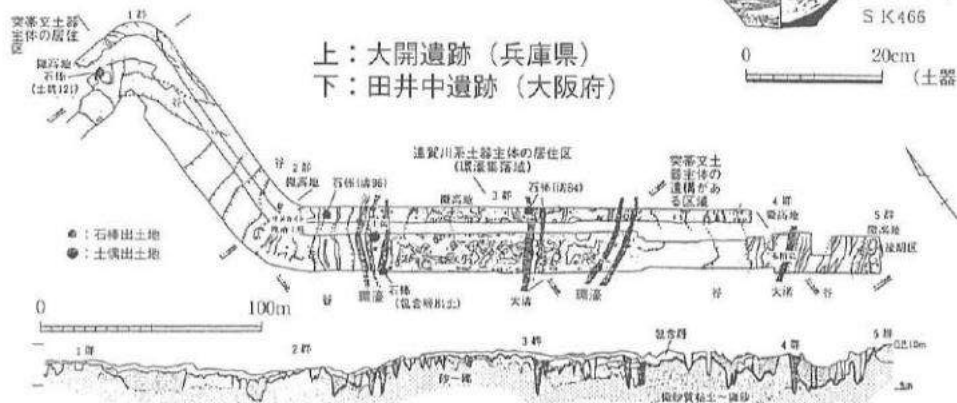
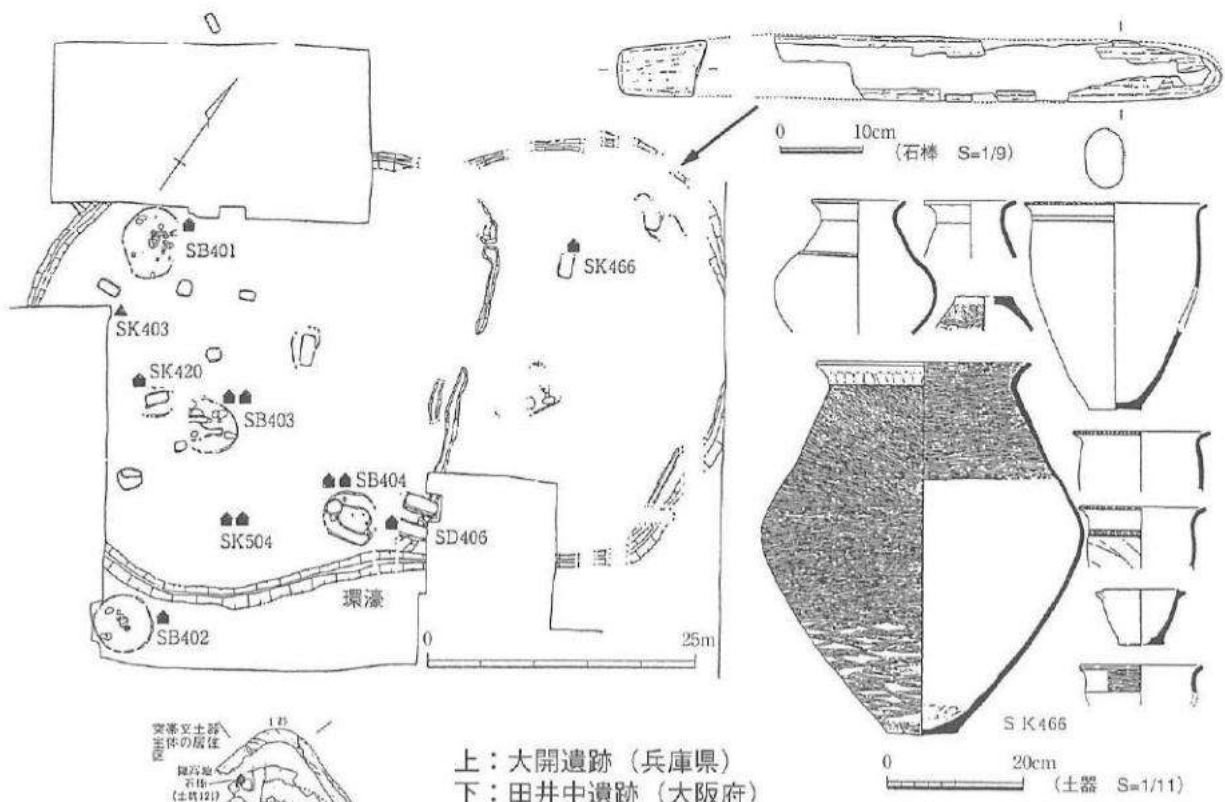
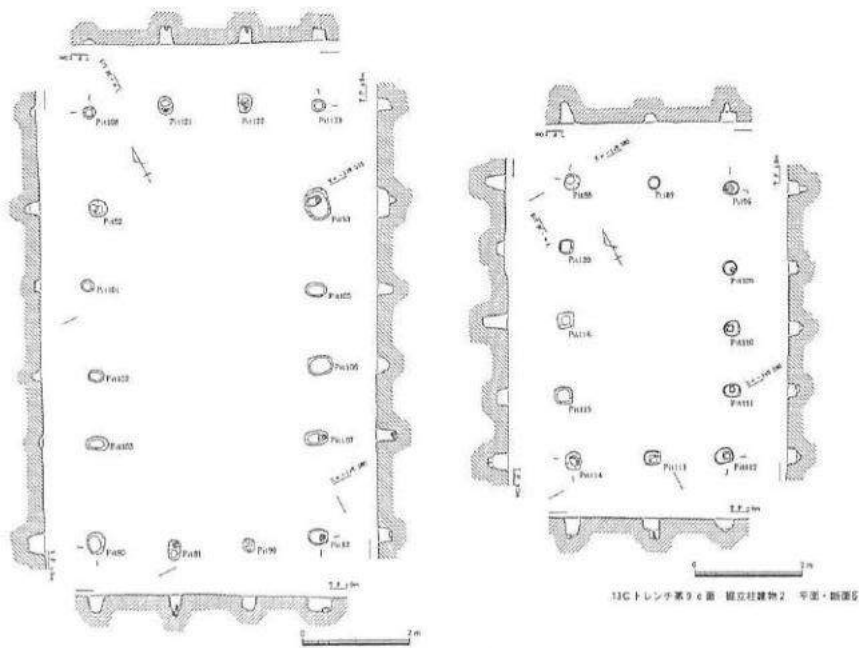
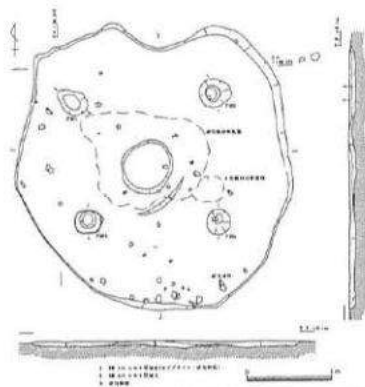


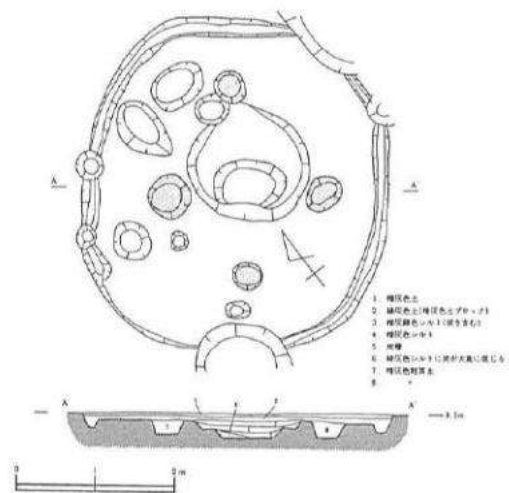
図392 近畿における初期環濠集落の様相



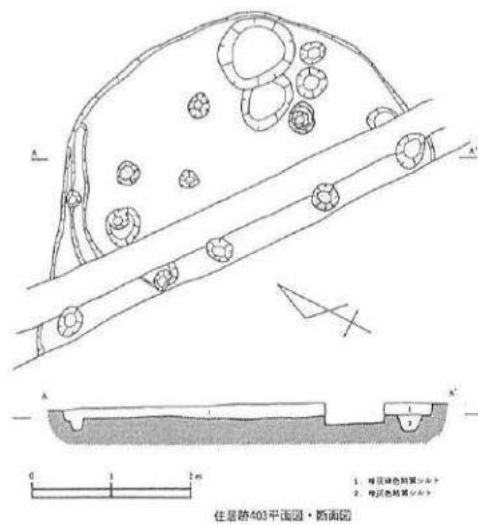
若江北遺跡検出の掘立柱建物



若江北遺跡検出の竪穴住居

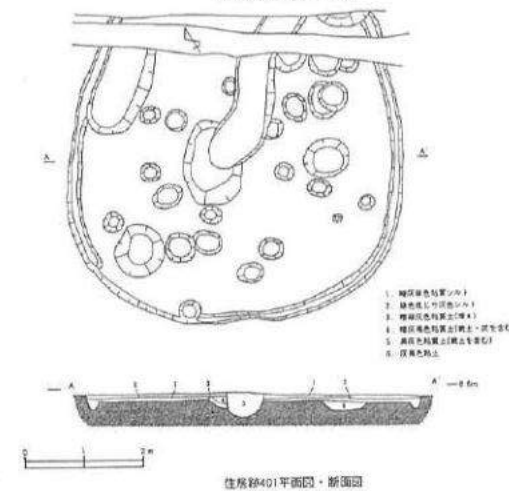


住居跡402平面図・断面図



住居跡401平面図・断面図

田井中遺跡検出の竪穴住居



住居跡401平面図・断面図

図393 周辺遺跡における弥生前期の建物遺構

以前の近畿自動車道関連の調査成果によると、瓜生堂遺跡周辺では、前期集落（居住域）が南に向かって、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、亀井北遺跡、亀井遺跡の順に確認されている（図391、若林1999、三好2001、ほか）。これらは前期でも一定の時期幅内での形成ではあるが、いずれも規模が小さい集落で、広く確認された例でも今回の瓜生堂遺跡北東部とほぼ同範囲に相当する。また、近畿最古段階の弥生環濠集落として周知される兵庫県大開遺跡や大阪府田井中遺跡でも、環濠で囲まれた範囲の長軸は70m～110m程度（図392）で、上記諸例の規模を大きくは逸脱しない。よって、今回の集落内容は、初現的な弥生遺跡としては一般的な集落規模であり、初期農耕段階における集団規模の普遍的な姿である。

今回検出の建物には、竪穴住居と掘立柱建物の2種が存在した。後者は本来、竪穴住居だった可能性が高いものである。仮に掘立柱建物として構築された遺構であったとしても、河内平野で今まで確認された弥生前期集落では同様に2種構造が発見されている（図393）ので、矛盾は生じない。竪穴住居に関しては、この時期の近年の周辺部検出例が、①平面形が不整円形、②比較的小形、③壁立ち上がりが浅く不明瞭、という共通属性を備えるとされる実態整理（三好2001）に今回例も多くは符合する。

微低地部で検出した水田遺構は、大阪府下の池島・福万寺遺跡（大阪府文化財調査研究センター2001）や志紀遺跡（大阪府文化財調査研究センター2002、秋山2002）の前期水田とともに、これまで近畿地方で発見されている初期水田遺構（図394～396）のなかでは最古段階の一群に属する。また、小区画水田である点は、他例と共通する。

（2）生駒山西麓産土器と金山産サヌカイトの高率現象ほか一遺物からの検討一

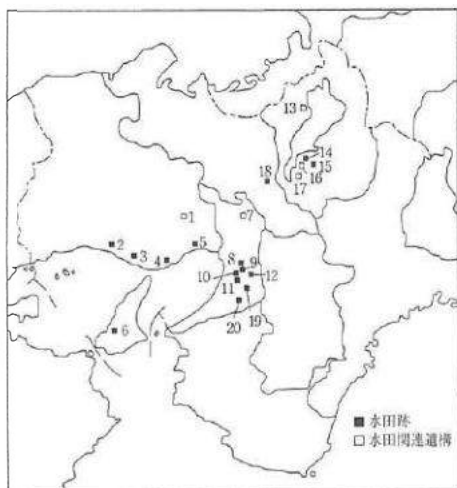
今回の初期農耕集落の遺物において最も特徴ある現象は、東約4～4.5km付近で採取される生駒山西麓産胎土を用いた土器が突出的に多くみられる実態である。当集落の近接地にあり、時間的に先行し近畿最古段階の前期集落・若江北遺跡でも同様に高比率を占めており、河内湖南岸域での弥生開始期における一種特殊な現象となっている。在地で採取できる粘土を用いる土器製作よりも、生駒山西麓地域の胎土や土器に多くを依存している事実は、後述するように、この地域の新来・初期農耕集団と、生駒山西麓における在来・縄文系集団との間に密接な関係性が基礎にあったことから実現したのであろう。

なお、このように生駒山西麓産土器が高率を占める現象に対する解釈として、胎土そのものが本遺跡や若江北遺跡のある沖積部集落まで運ばれてきて、すなわち土器胎土の移動（搬入）を想定しての土器製作がおこなわれたと言及されることがある。この点に関しては、今回比較的多く出土した焼粘土塊からの所見では、本文中（第5章第2節）に示したように、胎土移動は想定しにくいとするべきであろう。

土製品の土錘と紡錘車に関しては、西日本各地の初現的な弥生前期集落から比較的特徴的に出土する傾向がみられる。本遺跡でもこの地点における従前例（東大阪市文化財協会1999、東大阪市教委2002）に加えて、類例を増加させたことになる。特に、大阪湾周辺部の八尾市田井中遺跡（大阪府文化財調査研究センター1997、大阪府教委1983～1998）、茨木市新庄遺跡（大阪府教委1996）等でも確認されており、この時期における特質を示している。

石器石材では、サヌカイトにおいて、当地方で一般的な二上山産と推定できるもの以外に、香川県金山産と考えられるものがほぼ半数を占めていた。近畿地方（特に大阪湾沿岸部）では、それまでの在地二上山産を全面的に使用する状況に対して、弥生開始期にかぎり突出して非在地原材である金山産が搬入されており（図397、秋山1999a）、今回の集計データもまさに符合する結果となっている。

以上のような、生駒山西麓産土器と金山産サヌカイトの高率や土錘・紡錘車の存在は、特に河内湖周



近畿地方における弥生前期水田跡・水田関連遺構の出土遺跡分布
(森岡1995に加筆)

1. 対中 (井堰)
2. 美乃利 (水田)
3. 玉津田中 (水田)
4. 戎町 (水田)
5. 本庄町 (水田)
6. 雨流 (水田)
7. 安満 (井堰・用水路)
8. 若江北 (水田)
9. 山賀 (水田)
10. 友井東 (水田)
11. 美園 (水田)
12. 池島・福万寺 (水田)
13. 針江浜 (棚・土壌分析)
14. 服部 (水田)
15. 本部 (水田)
16. 小津浜 (用排水路・炭化米・土壌分析)
17. 雲仙寺 (流路・水路)
18. 京大構内 (水田)
19. 志紀 (水田)
20. 八尾南 (水田)

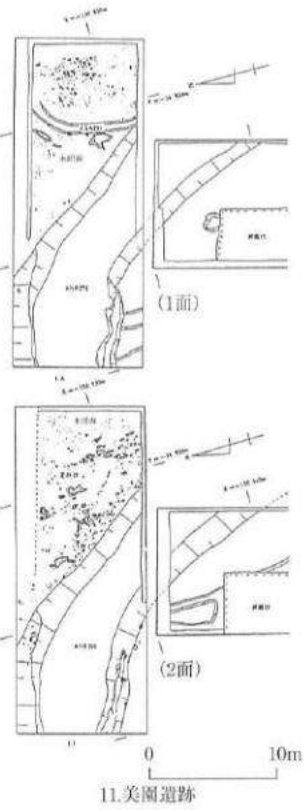
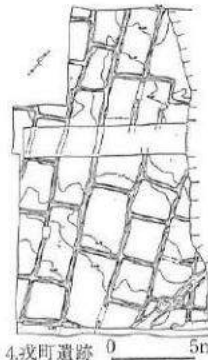
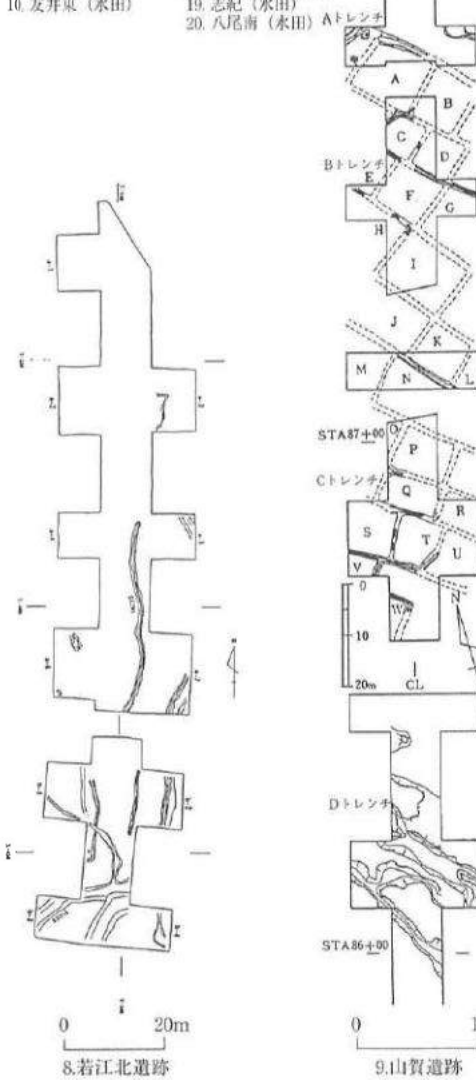


図394 近畿における弥生前期水田関連資料一

19.志紀遺跡

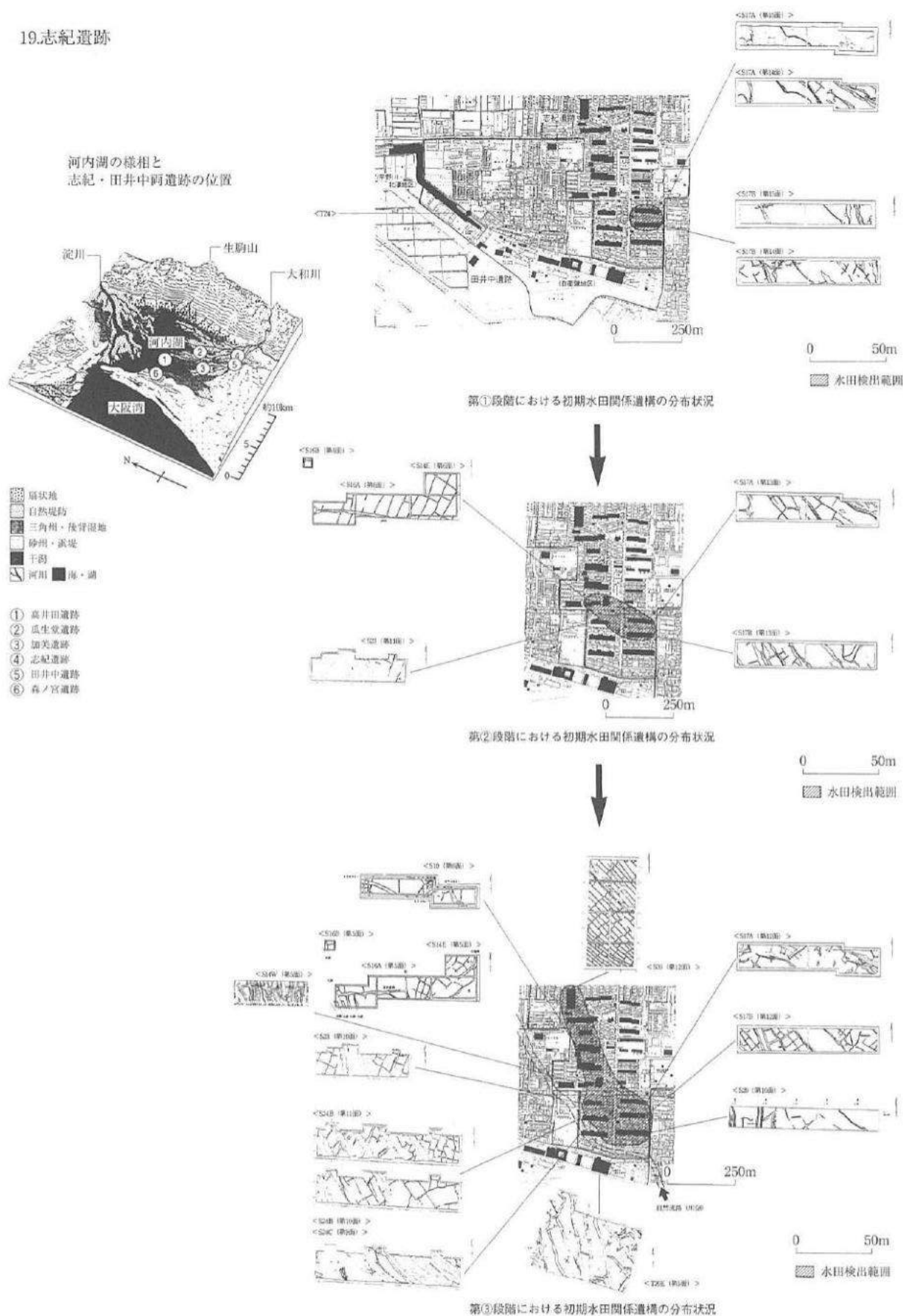


図395 近畿における弥生前期水田関連資料－2

12. 池島・福万寺遺跡

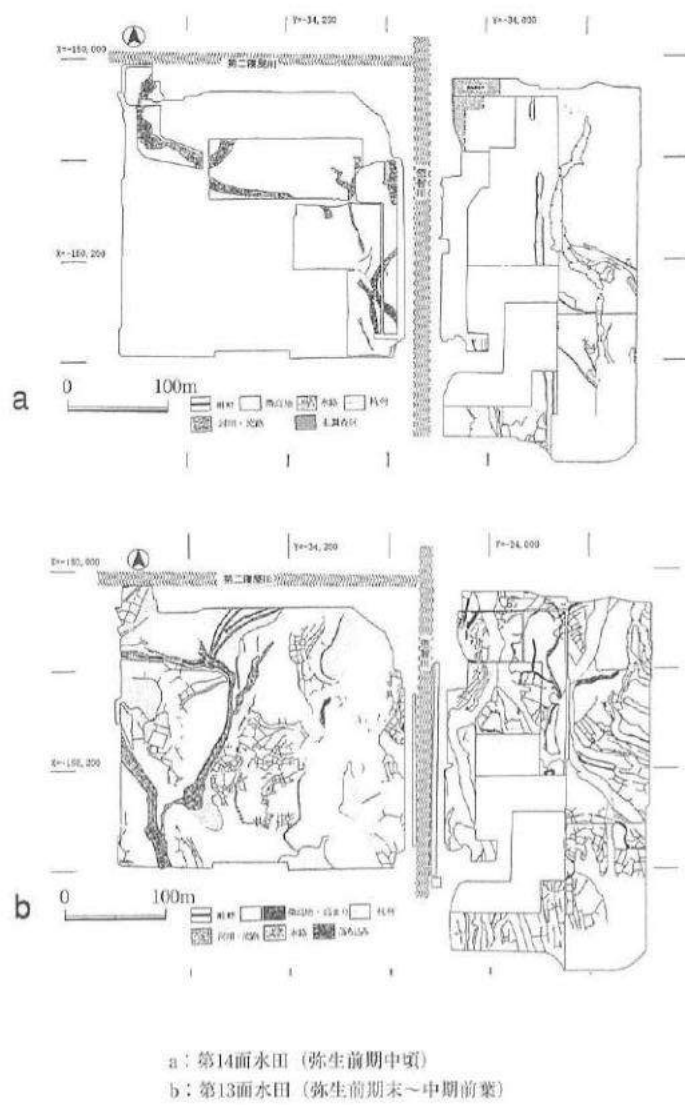
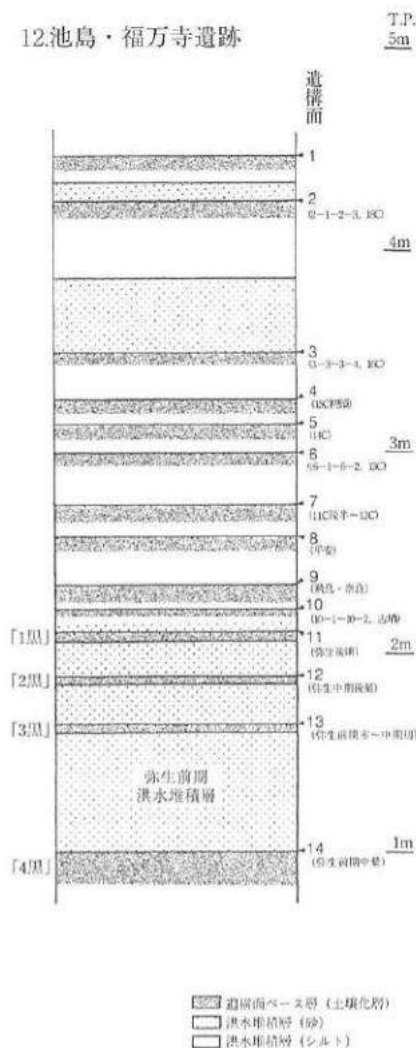


図396 近畿における弥生前期水田関連資料-3

辺部域における早い段階の農耕集落で特徴的にみられる現象であり、土器の特徴(編年の位置)だけでなくその他の遺物要素においてもこの時期の属性特質を遺憾なく示している。

3. 河内湖南岸域における初期農耕集落展開と弥生開始期状況

(1) 瓜生堂遺跡周辺: ウォーターフロントでの初期農耕集落の展開

本調査地点の弥生前期遺跡は、前期前半(新相)段階の比較的短い時間幅のなかで営まれていた小規模(環濠)集落で、しかも近接地では実際に耕作された水田域も確認できた。また、遺構・遺物内容ともに、比較的早い段階の農耕集落としての特質を備えている。このように、当時の集団の営みに付随する諸痕跡をセット関係で把握できた点が、今回の弥生前期における大きな収穫となっている。この成果をふまえ、瓜生堂遺跡周辺部、当時の河内湖南岸域における弥生前期集落の展開状況を整理しておこう(図398)。

付近で本格的な水稲栽培に基礎をおく最初の農耕集落は若江北遺跡である。この集落は、近畿最古段階の遠賀川系土器(前半古相)を出土する遺跡で、当地域のみならず近畿の初期農耕集落として重要な位

河内湖(湯)周辺部における金山産サヌカイトの搬入状況

A 地域 河内：河内湯南辺部 (東大阪市・八尾市) (W：薬料氏分析、N：肉眼観察)

遺跡名	時 期	分析 点数	金 (%)	山 二 (%)	上 他 (%)	方法	50%
久宝寺 (北)	縄文 晩期 (滋賀里Ⅲも主体)	30	0	30 (100)	0	W	
〃 (南)	〃 (長原式過半)	62	0	62 (100)	0	〃	
若江北 (5次)	弥生 前期 (I「古」)	105	10	「ほとんど」 (100か)	(0か)	N	
山 賀	〃 (I 中)	43	21 (48.8)	22 (51.2)	0	W	
〃	〃	16	7 (43.8)	9 (56.3)	0	〃	
〃	〃 (I 新)	20	3 (15.0)	17 (85.0)	0	〃	
美 園	弥生前～中期 (I末～Ⅱ)	100	1 (1.0)	99 (99.0)	0	〃	
龜 井	弥生 中期 (Ⅱ～Ⅳ)	230	3 (1.3)	228 (99.1)	0	〃	
瓜生堂	〃 (Ⅲ～Ⅳ)	85	1 (1.2)	84 (98.8)	0	〃	

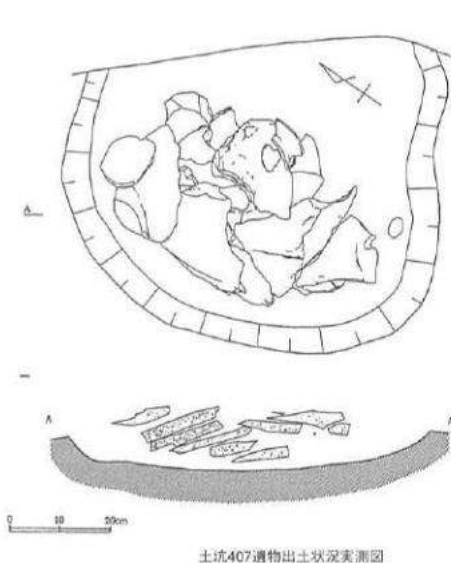
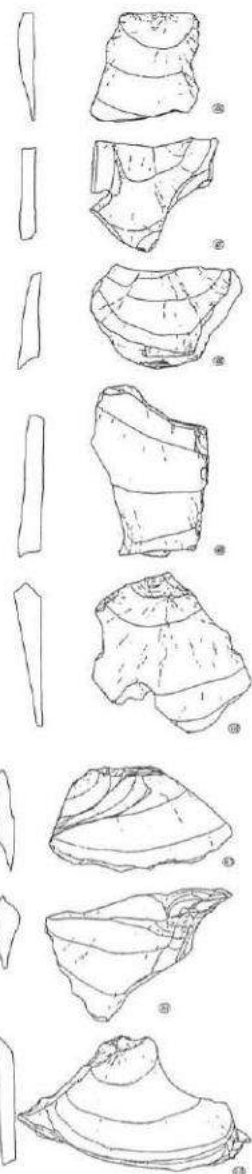
B 地域 河内：台地・丘陵縁辺 (東大阪市・八尾市)

遺跡名	時 期	分析 点数	金 (%)	山 二 (%)	上 他 (%)	方法	50%
城 山	旧 石 器	11	0	11 (100)	0	W	
大 堀	旧石器～縄文	12	0	12 (100)	0	〃	
城 山	縄 文	7	0	7 (100)	0	〃	
長 原	縄文 晩期 (長原式)	28	1 (3.6)	27 (96.4)	0	〃	
田井中	弥生前期 (I「古」～中)	800	「一定量」 (50以上)	(50以下)		N	
田井中	弥生前期 (I中(末))	15	0 (0か)	13 (100か)	0	W N	(落込み848)

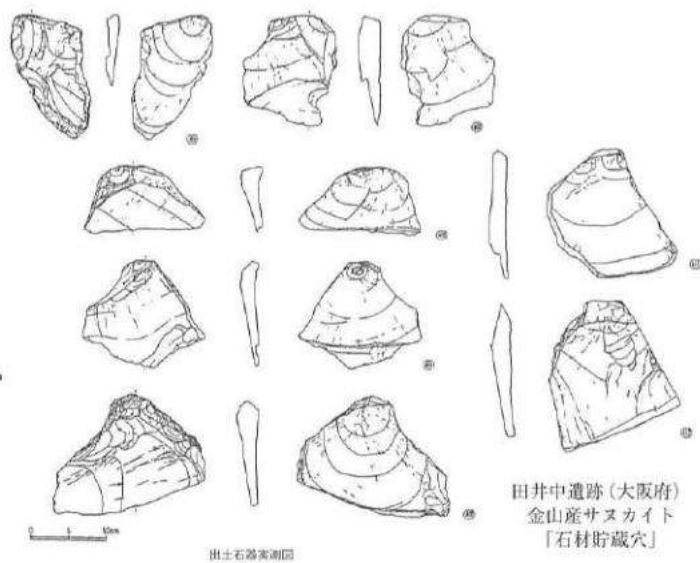
C 地域 河内：生駒西麓(中群) (東大阪市)

遺跡名	時 期	分析 点数	金 (%)	山 二 (%)	上 他 (%)	方法	50%
馬場川	縄文 晩期 (滋賀里Ⅲ中心)	5	1 (20.0)	4 (80.0)	0	W	
〃	〃		あり (1%以下)			N	
鬼塚 (8次)	縄文 晩期 (滋賀里Ⅳ式)	41	4 (9.8)	37 (90.2)	0	W	
〃	〃 (Ⅳ～Ⅴ式)	48	2 (4.2)	46 (95.8)	0	〃	
〃	〃 (Ⅴ式)	40	1 (2.5)	39 (97.5)	0	〃	
植 附 (5次)	弥生前期 (I前半)	69	「大半」 (90か)	(10か)		N	
鬼虎川 (19次)	弥生 中期 (Ⅱ)	58	0	58 (100)	0	W	
西ノ辻	弥生 中期 (中頃)	120	1 (0.8)	119 (99.2)	0	〃	

(各報告書および栗田薫・岩瀬透・駒井正明・福永信雄・) (トーン部：金山産、それ以外：二上山産)
(松田順一郎・三好孝一各氏ご教示内容から作成)

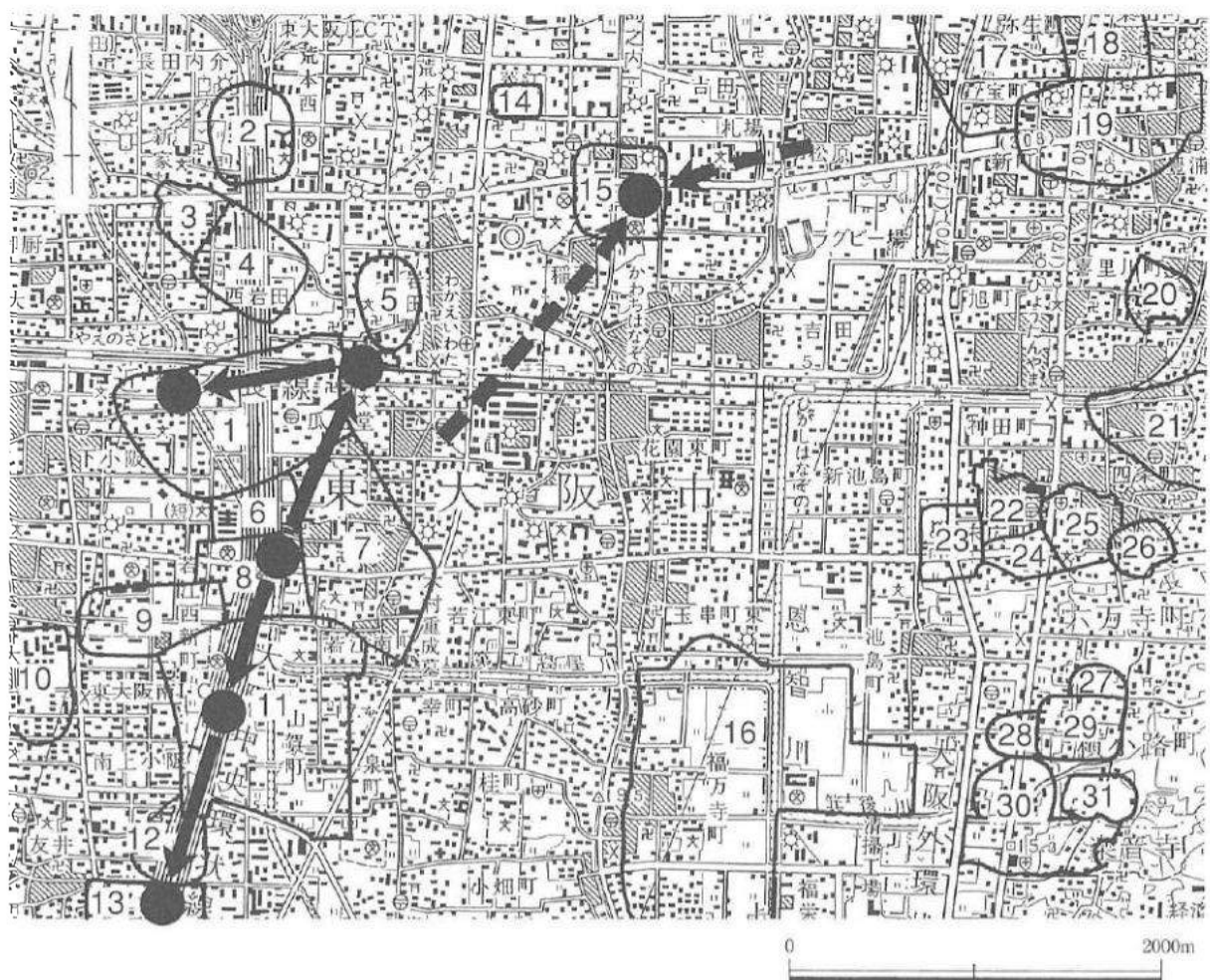


土坑407遺物出土状況実測図



田井中遺跡(大阪府)
金山産サヌカイト
「石材貯蔵穴」

図397 近畿弥生開始期における金山産サヌカイトの搬入状況



- 1 瓜生堂遺跡 2 新家遺跡 3 意岐部遺跡 4 西岩田遺跡 5 岩田遺跡 6 巨摩焼寺遺跡 7 若江遺跡
 8 若江北遺跡 9 上小阪遺跡 10 小若江遺跡 11 山賀遺跡 12 友井東遺跡 13 美園遺跡 14 菱江寺跡
 15 稲葉遺跡 16 池島・福万寺遺跡 17 鬼虎川遺跡 18 西ノ辻遺跡 19 鬼塚遺跡 20 皿池遺跡
 21 山畑古墳群 22 五合田遺跡 23 北島池遺跡 24 段上遺跡 25 縄手遺跡 26 上六万寺遺跡 27 北屋敷遺跡
 28 西代遺跡 29 馬場川遺跡 30 楽音寺遺跡 31 西の口遺跡

図398 河内湖南沿岸域（ウォーターフロント）における初期弥生集落の展開

置を占める。次の前半新相段階の集落は、山賀遺跡と今回の瓜生堂遺跡北東部の集落である。距離関係から推測して、両集落とも若江北遺跡から直接的に分岐、移動してきた後続集落と判断してよいといえる。続く前期後半段階では、山賀遺跡はさらに内陸部へ南進して美園遺跡を形成し、瓜生堂北東部地点は西進し本遺跡C地点の集落へ移る。つまり、弥生前期の時間内では近接地域内において、700m程度の距離間を移動し、新しい集落を成立、展開させている。これらの遺跡以外にも近接地では、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡のように弥生前期土器を若干ながら出土する遺跡も存在するので実態は一層複雑だったと考えられるが、現状における展開把握の要点は相違ないであろう。

同一地点に定着して集落規模を拡大させ、増大する集団構成員をかかえる方向性ではなく、このように近似した集落規模のままで、隣接地に移動していったという実態をみせる。これは、かつて考察したように（秋山2002d）、当時における河内地域での、水稻農耕技術・経営の発展性と限界性に起因した集団展開のあり方を反映したものと想定できる。すなわち、当時の水田適地での土地条件と水田経営にお

ける水利管理システムの未発達段階という両者のかねあいにおいて、集団規模をおおむね維持したままで新しい水田可耕地を求めて移動せざるを得なかった、そのような事情に起因する近接地移動と理解できる。ただし、集落域自体の立地ベースが、湖岸域という水位変動による影響を直接的に受けやすい環境にあったことも考慮しておく必要がある。その場合、微高地に位置する居住地が水位変動に左右されるなら、微低地の水田立地環境も大きく影響を被らざるを得なかったであろう。

なお近接地では、本遺跡北東部集落とおおむね同時期の遺跡に、北東約1.8kmに位置する稲葉遺跡がある。この遺跡も、今回の初期農耕集落とほぼ同時に、若江北遺跡から分岐した集落であった可能性がみられる。しかし、生駒山西麓域の水走・鬼塚ほかの遺跡群からも近接距離にあるので、どちらからの分岐かは現状では判断できない。

（２）近畿弥生開始期における「共生」論との関係

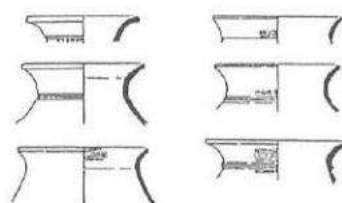
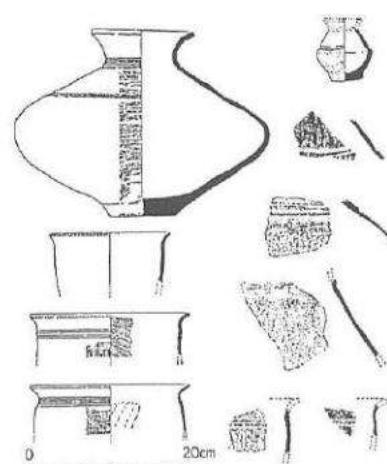
ところで、近年の発掘調査の進展によって、近畿地方における縄文・弥生移行期の様相が、遺構・遺物の詳細にそくし具体的に判明するようになってきている。それらの現象整理から筆者は、河内湖周辺地域では、在来・縄文系集団と新来・弥生系集団の従来説による「住み分け」論ではなく、両系集団による近接地内での「共生」（共存関係）こそが、当地の弥生開始期における複雑な過渡的様相の実態を把握できるものと考えている。そして、突帯文土器と遠賀川系土器という使用土器種のちがい、環濠集落や本格的な水稲耕作の有無という集落形態と経済的基盤の差異をこえて、両系集団の間には接触のおおむね当初段階からかなり密接な関係が達成されていたと想定する（秋山1999a）。平たい言葉で表現するなら、「親しい近所つき合い」（秋山1999b）ともいうべき緊密状況が形成されていたと考えるわけである。

具体的には、河内湖南岸奥地では、長原遺跡と八尾南遺跡の関係（図399）、および、田井中遺跡内（図392-下）でのあり方、さらには、近年の当センター調査（旧JR操車場部）における久宝寺遺跡内での状況等が代表的な事例となっている。単純化して表現するならば、これらの遺跡間・内では、ごく隣接地において、縄文末・突帯文土器（長原式ほか）を保有する在来・縄文系集団と古い段階の遠賀川系土器を携えた新来・弥生系集団の両者が、その存続期の全期間といえないまでも、一定の間は共生していた様相を十分想定できるようになってきた。同様な現象整理は、河内湖東岸域（生駒山西麓域）の鬼塚遺跡内部あるいは鬼塚遺跡と植附遺跡、水走遺跡と鬼虎川遺跡での状況、さらには、大阪南部・和泉地域の池浦遺跡と虫取遺跡、四ツ池遺跡内部でも可能である。そして、この近畿でのあり方は、瀬戸内地方での弥生開始期の集団関係（秋山1995）と比較的類似したものと評価できる。

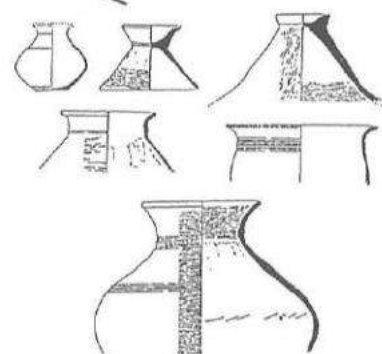
では、河内湖南沿岸域、ウォーターフロントとでもいうべき瓜生堂遺跡一帯での状況はどうだろうか。

若江北遺跡、山賀遺跡、瓜生堂遺跡の直近周辺部では現在のところ、在来・縄文系集団ともいうべき突帯文土器を主体的に出土する遺跡はまったく存在しない。要するに、上記したような隣接地域内での両系集団間の直接的な共生関係は想定できない。今後、未知の縄文系集落が発見される可能性は絶無ではなく²⁾ 断定はさしひかえるべきだが、現状では次のように推定しておきたい。その際、若江北遺跡や瓜生堂遺跡北東部の前期土器における、生駒山西麓産品の突出的高比率が重要な要素となってくる。

この地域の古い段階の遠賀川系土器に非在地の生駒山西麓産が多く含まれ、しかも、生業において重要な土錘や紡錘車もその胎土製であるという現象からは、在来・縄文系集団の本拠地である生駒山西麓地域との密接な関係は決して否定できない。一方、生駒山西麓地域は河内湖の東接部にあたり、そのすぐ沿岸域には突帯文土器やその後続型式（「水走式」）を主体的に出土する鬼塚遺跡や水走遺跡が立地す



八尾南遺跡M地点流路出土遠賀川式土器
(畿内第Ⅰ模式中段階)



八尾南遺跡N地点流路他出土遠賀川式土器
(畿内第1様式古・中段階)

(田中1992・森井1995に加筆・改変)

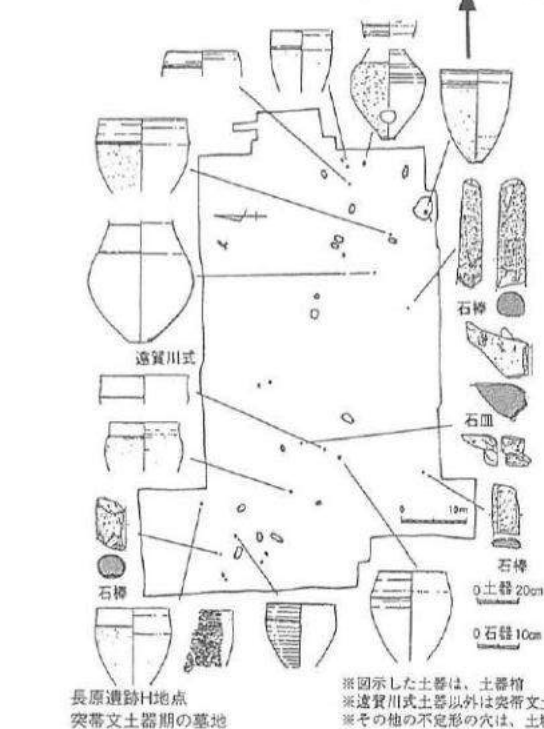


図399 縄文系集団と弥生系集団の具体的「共生」状況（長原遺跡・八尾南遺跡）

る。それらの集落と瓜生堂遺跡の直線距離は約3.5kmを測る。しかも、両者間には河内湖が存在し、ともにウォーターフロント立地の集落同士では、湖上ルートを利用すれば指呼の間ともいうべき地理的環境にあることになる（図389・398）。したがって、河内湖を有効的に介在させて、湖南岸の若江北遺跡や瓜生堂遺跡の新来・弥生系集団と、湖東岸の鬼塚遺跡や水走遺跡の在来・縄文系集団は、他の多くの内陸地域で両系集団が近接地共生していた状況と類似し同質の、密接な交流関係を形成していたのであろう。河内湖の存在自体が、陸路とは比べものにならないほど両者間の距離感を縮めたと理解できる。このような想定が、当時の河内湖をはじめとする自然環境的要素と生駒山西麓産土器の高率という人的要素を、現状では整合的な解釈に導くものと考えられる。いうなればこの場合も、両系集団の「住み分け」というよりは、場所的特性に相応した「共生」関係の一形態として位置づけるべきと判断したい。

上述してきた地域的關係が内在した点を前提にすることによって、この「共生」期およびその直後期における、河内湖南岸域での生駒山西麓産土器の突出的現象や同胎土の土錘や紡錘車の存在が理解できるものとする。おそらく、生駒山西麓域内で在来・縄文系集団と共生していた弥生系集団もしくはその過程で「弥生化」をとげた在地集団によって製作された日常什器の遠賀川系土器や土製労働用具が、あたかも同一集団内での自給と同じようなかたちのもとで、若江北遺跡や瓜生堂遺跡にもたらされたのであろう。

4. 結びにかえて

以上、今回の調査成果を中心素材にすえ、瓜生堂遺跡北東部における弥生前期前半集落の内容整理をおこなった。この地点の初期農耕集落は近年あらたに確認されたこともあり、これまで総合的には取り上げられることがなかったので、調査担当としての一定の責は果たせたと考える。また、この段階の遺跡としては、集落・水田・遺物という三者の具体的内容とその相互関係性が判明する事例としては西日本でも稀少例で、今後の弥生開始期の考究にあたっての重要な素材を提供できたといえる。

それらを基礎にし、近畿地方における近年の調査・研究成果を援用して、若江北遺跡や瓜生堂遺跡周辺、河内湖の直近南岸域における弥生開始期の集落展開を整理した。加えて、この地域ならではの「弥生化」の具体相をめぐって、生駒山西麓地域の在来・縄文系集団との関係性を考慮して仮説を述べた。

今回の整理や評価の当否は周辺部の発掘の進捗等に当然ながら左右されることになるが、今後それに十分な注意をはらっていきたい。

〔註〕

- 1) 今回の出土品（本書図68-3661・3662）を石棒片とする評価に相違なければ、また、近接地の若江北遺跡でも石棒類の可能性ある石製品の検出がみられ、美園遺跡でも石棒類が出土している事実とも関連させて、付言しておこう。近畿各地での石棒類や土偶が出土した遺跡傾向を整理すると、弥生時代開始期において、在来・縄文系集団では「女性原理呪術具」の土偶を、新来・弥生系集団では「男性原理呪術具」の石棒類を主体的に保有し、それらを用いた「祭祀」を基軸としつつ縄文・弥生移行期における諸矛盾に対処し解決をはかったという理解（秋山2004、大阪府立弥生文化博物館2003）に、今回の事例も符合することになる。
- 2) 山賀遺跡では若干の縄文晩期末・突帯文土器（長原式ほか）の出土がある。この遺跡周辺部が、在地・縄文系集団の遺跡が発見される可能性がある候補の一つとはなる。しかし、弥生前期・遠賀川系土器の膨大な出土量に比べて突帯文土器の量は微々たるもので、現有情報では如何とも評価のしようがない。

〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1995 「各地域での弥生時代の始まり 吉備」『弥生文化の成立』（角川選書265） 角川書店
- 1999 a 「近畿における弥生化の具体相」『論争 吉備』 考古学研究会
- 1999 b 「<かいだい>ジョウとヤヨイからのメッセージ」『第3回現地公開劇パンフレット 公開劇『コメと出会った縄文人』』（財）大阪府文化財調査研究センター池島分室
- 2002 a 「弥生の石棒」『日本考古学』14 日本考古学協会
- 2002 b 「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』 古代吉備研究会
- 2002 c 「弥生開始期における土偶の意味」『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター
- 2002 d 「河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって」『志紀遺跡（その2・3・5・6）』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 2003 「弥生時代・畿内石庖丁の生産と流通」『道具の生産流通と地域関係の形成～縄文から古墳まで～』 古代学協会中国四国支部
- 2004 「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」『考古論集 河瀬正利先生退官記念論文集』 河瀬正利先生退官記念事業会
- 井藤暁子 1981 「入門講座弥生土器－近畿Ⅰ－」『月刊考古学ジャーナル』195 ニューサイエンス社
- 瓜生堂遺跡調査会 1972 「瓜生堂遺跡 資料編」
- 1973 「瓜生堂遺跡Ⅱ」
- 1981 「瓜生堂遺跡Ⅲ」
- 大阪の弥生遺跡検討会 1977 「大阪の弥生遺跡Ⅰ」
- 大阪府教育委員会 1967 「東大阪市瓜生堂遺跡の調査」
- 1986 「稲葉遺跡発掘調査概要・Ⅰ」
- 1993 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅲ」
- 1994 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ」
- 1996 a 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅴ」
- 1996 b 「新庄遺跡」
- 1997 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅵ」
- 1998 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅶ」
- 1999 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ」
- 2000 「田井中遺跡発掘調査概要・Ⅸ」
- （財）大阪文化財センター（ほか）1980 「瓜生堂」
- 1981 「巨摩・瓜生堂」
- 1984 「山賀（その3）」
- 1985 「美園」
- 1991 「河内平野遺跡群の動態Ⅱ」
- （財）大阪府文化財センター 2003 a 「久宝寺遺跡現地公開資料」
- 2003 b 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ」
- （財）大阪府文化財調査研究センター 1992 「河内平野遺跡群の動態Ⅴ」
- 1993 「河内平野遺跡群の動態Ⅵ」
- 1996 a 「河内平野遺跡群の動態Ⅲ」
- 1996 b 「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書－第5次－」
- 1997 「田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）」
- 2001 「池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXⅦ」
- 2002 「志紀遺跡（その2・3・5・6）」
- 大阪府立花園高校地歴部 1970 「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』

- 大阪府立弥生文化博物館 2003 『弥生創世記－検証・縄文から弥生へ－』
- 大野 薫 1992 「瓜生堂遺跡北東辺部の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第25回）資料』
- 梶山彦太郎・市原 実 1986 『大阪平野のおいたち』 青木書店
- 菊井佳弥 2003 「久宝寺遺跡の土偶について」『大阪文化財研究』24（財）大阪府文化財センター
- 神戸市教育委員会ほか 1993 『大開遺跡発掘調査報告書』
- 佐原 真 1968 「近畿地方」『弥生土器集成 本篇2』 日本考古学協会
- 田中清美 1992 「河内平野の開拓と弥生文化」『考古学論集』4 考古学を学ぶ会
- 田畑直彦 1997 「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館大学考古学論集刊行会
- 地学団体研究会大阪支部 1999 『大地のおいたち』 築地書館
- 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 『瓜生堂遺跡』
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社
- 中西靖人 1984 「前期弥生ムラの二つのタイプ」『縄文から弥生へ』 帝塚山考古学研究所
- 1989 「大阪府瓜生堂遺跡」『探訪 弥生の遺跡 畿内・東日本編』 有斐閣
- 1992 「農耕文化の定着」『新版古代の日本 5 近畿Ⅰ』 角川書店
- 東大阪市教育委員会 1980 「瓜生堂遺跡東限の試掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 1979年度』
- 2000 a 『瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書』
- 2000 b 『瓜生堂遺跡第47－1次発掘調査中間報告書』
- 2002 『瓜生堂遺跡第46、47－1・2次発掘調査報告書』
- （財）東大阪市文化財協会 1997 『瓜生堂遺跡試掘調査報告』
- 1999 「瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』
- 三好孝一 2001 「河内湾東・南縁部における弥生文化の受容と定着」『みずほ』35 大和弥生文化の会
- 森井貞雄 1995 「墓制の変化（二）畿内－弥生系集団の方形周溝墓」『弥生文化の成立』（角川選書265） 角川書店
- 森岡秀人 1995 「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生文化の成立』（角川選書265） 角川書店
- 若林邦彦 1999 a 「大阪平野における拠点集落の性格－河内平野遺跡群を中心として－」『みずほ』31 大和弥生文化の会
- 1999 b 「中・四国～近畿地方弥生地域社会成立に関する基礎的考察－時間軸整備を中心に－」『調査研究報告』
- 2（財）大阪府文化財調査研究センター
- 2000 「河内湯沿岸地域における弥生文化成立期の様相」『第47回埋蔵文化財研究会 弥生文化の成立 各地における弥生文化成立期の具体像 発表要旨集』 埋蔵文化財研究会

〔図出典〕

図389：秋山2002 a（もとは、（財）大阪文化財センターほか1991、梶山・市原1986を合成・加筆作成）、図390：本書掲載各遺構図面および東大阪市教育委員会2002、（財）東大阪市文化財協会1999から合成・加筆作成、図391：若林1999 a、同2000から作成、図392：秋山2004から作成、図393：若林2000、図394～396：秋山2002 dから作成、図397：秋山2003（もとは、秋山1999 a、大阪府教育委員会1996 aから作成）、図398：新規作成、図399：秋山1999 aから作成

〔謝辞・付記〕

本編の一部は、第11回（2003年7月17日）ほかの各回の瓜生堂（近鉄）勉強会の発表内容や討論内容に基礎をおいている。参加者の多くの方から有益なご教示をいただいた。末筆ながら深謝申しあげたい。